

機関番号：14503
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20530692
 研究課題名（和文） 新教育運動期における学校空間の構成と子どもの学習活動の変化に関する比較的研究
 研究課題名（英文） A Historical and Comparative Study on the Reconstruction of Spaces in the School and Subsequent Changes of Children's Learning in the Era of the New Education Movement
 研究代表者 渡邊 隆信（WATANABE TAKANOBU）
 兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授
 研究者番号：30294268

研究成果の概要（和文）：

今日、学校空間を、子どもにとって画一的で閉鎖的な構成から、形式にとらわれない自由な環境へと改革しようとする試みが見られる。こうした試みの起源のいくつかは、新教育運動期に求めることができる。本研究では、アメリカ、イギリス、ドイツの新教育運動期における校舎、教室、校庭といった学校空間の変革について調査した。その結果、学校空間の変革が子どもの創造的で協働的な学習活動のための環境と機会をもたらしていたことを解明した。

研究成果の概要（英文）：

Nowadays, there are several experiments which try to transform children's spaces in the school from standardized, closed setting to more informal and free environment for children. We can find some origins of these experiments in the era of the New Education Movement. We made research on the reformation of school spaces, e.g. school buildings, classrooms, playgrounds, etc. in the U. S. A., England, and Germany in that era. The research has proved that the reformation of spaces in the school provided children with environments and opportunities for creative and co-operative learning.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 1,700,000 | 510,000 | 2,210,000 |
| 2009年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2010年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：空間、新教育、学校、教室、学習活動、アメリカ、イギリス、ドイツ

1. 研究開始当初の背景

子どもたちが学級単位で均質な四角形の教室に入れられて長い時間を費やすことに対しては、これまで多くの批判がなされてきた。「学校の生活空間を、もっと子どもの感性、身体性、活動性を反映させたものにつ

くり変えていく必要がある」(高橋勝『子どもの自己形成空間』川島書店、1992年、68頁)ことが長らく強調され、学校に空間的な「開放性」を付与することが提唱されてきた。それにもかかわらず、伝統的な学校空間の構成には、劇的な変化が現在にいたるまでみら

れない。大きな理由のひとつは、空間上の「開放性」と「閉鎖性」の問題が、教育実践における秩序維持や学習の効率性といった学校教育全域に関する問題と密接に結びついていることにある。学校教育そのものが有している制約のなかで空間構成上の改良を行うために踏まえておくべき論点は何であり、またそのような論点を意識したうえで提起されるべき具体的な改良の方策としてどのようなことが考えられるだろうか。

19世紀末から20世紀初頭の新教育運動期は、そのような学校空間の構成に関する論点と具体策の宝庫であり、現在の学校が抱える空間構成上の問題を先取りしているという点において、注目に値する。新教育運動期の学校空間の変革（例えば、特別教室や図書室の設置、固定式から可動式の学習机へ）と学習活動の変化（例えば、問題解決学習や協働学習の生起）を歴史的に検証し、教育に関する時間や集団形成といった他の次元との関連も視野に入れつつ、総合的に学校空間の構成を吟味し、その課題を明らかにすることは、現代の学校空間と学習活動の問題を考えていく際の重要な基盤となると考えられる。

2. 研究の目的

以上の問題関心から、本研究では、新教育運動期において学校の空間構成にもたらされた変革の実態を明らかにするとともに、そうした空間構成上の変革がいかなる教育理念に支えられながら新しい学習活動を可能にしていたのかを、ドイツ、アメリカ、イギリスの具体的な事例に即して比較史的に解明することを目的とした。

3. 研究の方法

以下の3つの側面から研究を遂行した。

第一は、多様な学校空間が各地で出現した新教育の実践を、ドイツ、アメリカ、イギリスの初等・中等学校を中心に分析し、学校の空間構成の実態を解明することである。その場合、どのレベルで空間を捉えるかが重要である。学校空間のレベルを広い方から順に並べると、①学校を都市に建てるか田園地帯に建てるかといった、学校の立地条件、②学校の敷地全体における校舎、運動場、学校園などの配置、③校舎内での諸施設、すなわち教室、講堂、図書室、特別教室、廊下などの配置と活用、④教室における黒板、教卓、学習机、椅子やそれらを包み込む教室の壁、床、ドア、窓などの編成、となる。

もとより3年間という限られた期間内に、上記の4つのレベルすべての空間の実態を明らかにすることはできない。対象を焦点化することで各国の共通点と相違点がより明確になるという理由からも、本研究では、まずは④の教室空間のレベルを中心としなが

ら、新教育実践における空間構成に着目することにした。そして、子どもの学習活動が教室の外へと展開していく限りにおいて、③②①といった空間的広がりを考慮にいった。

第二は、新教育における学校の空間構成が、いかなる教育理念のもとで考案され成立していたのかを解明することである。実際の学校空間を条件づけたのは、教育理念だけではなく、学校運営主体の経済的状況、医学的・衛生学的理解、地域の気候風土、建築学上の技術革新やモードなどが複合的に影響を及ぼしあっている。本研究では、現実には学校空間のあり方を規定していたそうした諸要素を考慮しながら、新教育で重視された子どもの自発性、創造性、協働性といった理念がどのように学校空間に投影されていたのかを明らかにした。

第三は、新教育運動期に一定の教育理念のもとで構成された学校空間において、いかなる新しい学習活動が展開されたのかを探ることである。この時期に設けられる理科や図画の特別教室は、観察や実験などの体験的・操作的な学習の導入をもたらした。また、教室内の学習机が可動式になったことは、画一的な学級単位の一斉授業方式からの脱却を促し、個人やグループ単位の学習集団の編成につながっていった。新しい空間のもとでのそうした学習の内容や方法の変化を、現地での一次史料調査に基づき、事例に即して具体的に解明した。

4. 研究成果

研究成果の概要は以下の4点にまとめることができる。

第一に、アメリカにおいて子ども中心という進歩主義教育の思想が、校舎にどのように現れ、どのような教育実践が展開したかを確認した。19世紀の多くの校舎は単級であった。その構造は教会をモデルとしており、教師が教育空間を支配する権威をもつことが理想とされていた。19世紀末から、都市部では、多くの教室を持つ校舎やいろいろな種類の教室や設備をもつ大規模な校舎が建設された。建築家は、安全、採光、換気などに配慮した校舎の設計に取り組み始めた。子どもは、学校で座学だけを強要されるのではなく、働いたり、遊んだりする機会と場所も与えられたという点で、これらの校舎は進歩主義教育の影響を受けていた。しかし、それらは、それぞれの設備や教室が教科と密接に結びついており、学習すべき内容、場所、時間についても、子どもの自由が大きく制約されていた。校舎の構造が子どもの学習内容を制約していたのであり、子ども中心の活動があったとみることはできない。20世紀の前半に建築と教育のつながりを実現させようとする動きは、1940年に完成したクロウ・アイランド小

学校の校舎に集約されていた。その校舎は、子どもの自由とリズム、協同、創造的表現、学校と地域とのつながり、などに配慮されており、進歩主義教育が掲げる「子ども中心」の理念が反映していた。

第二に、イギリス新教育運動のめざした学校空間のもとでの学習の内容や方法の変化を、新学校とその影響下にあった公立学校の事例に即して解明した。まず、新教育運動以前の国家統制期には、モントリアル・システムやギャラリーなどを考案し、3R'sの注入と道徳・規範の涵養を重視した。が、次第に健全な心身の育成を着目し、実物教授の方法の採用とそれを可能にする学校設備が開発された。また、公教育制度の成立した1870年代の公立の学校建築は、ホールの周辺に教室を配置し、ホールから校長が各教室の授業を監視することができるシステムであった。この旧教育を批判して生じた新教育運動第I期のアボッツホーム校、ビデールズ校、キング・アルフレッド校の空間構成は、新教育の理念に基づくカリキュラムとともに様々な学習形態と設備・場所を提供し、学習の自由度を保証した。新学校は初等段階の教育に影響を与えるが、それが「教育の新理想」の活動であり、新教育運動第II・III期の活動を形成している。この時期の新教育思想は公立学校に大きな影響を与え、新教育を標榜する公立学校ではホールを図書館に転用した自己学習・自習、多様な場所での学習機会の提供、教室の壁面利用、家庭的雰囲気のある教室構成など、多様な学習内容と学習方法の創出に挑戦した。学校空間に関する新教育思想の集大成は、新教育連盟(New Education Fellowship, 1921-)を主導したエンソアのユートピア小説「明日の学校」(School's of To-morrow, 1926)のなかの学校論に確認することができる。

第三に、ドイツ新教育運動期における学校空間と学習活動の特色について、ドイツ新教育の代表的学校の一つであるオーデンヴァルト校(1910年創設)を事例にして検討した。現地での資料調査に基づいて、第一に、20世紀初頭ドイツの学校建築をめぐる議論を概観したうえで、オーデンヴァルト校における空間構成の特徴について考察した。同校の学校建築においては、美的であることとならんで、健康的であることが特に重視された。建築設計は、地元の建築家メッツェンドルフによるもので、1910年代後半以降に流行する現代的な学校ではなく、地元の素材を用いた伝統的な建築技術を重視した「郷土様式」が採用されたことを明らかにした。第二に、構成された学校空間が、同校での学習活動とどのように結びついていたのかを検討した。同校では1913年以降、独自の授業形態(コース組織)を開発し実施していたが、多様な学習活

動に応じて、教科教室、特別教室、作業室が設けられた。教室の机と椅子は可動式で、学習内容と方法に応じて柔軟に配置が決められた。授業外では、学校運営の「心臓」として重要な役割を果たしていた「学校共同体」(一種の全校集会)のために、「学校共同体室」という特別室が準備されたことを明らかにした。第三に、1923年から1926年にかけて生徒たちが参加した運動場建設を事例に、学校空間創造への生徒の関与自体が新教育的な実践であったことを明らかにした。運動場建設というプロジェクトにおいては、「労働」、「共同体」、「自治」、「身体」といった新教育的要素の結合を見ることができた。

第四に、新教育運動の典型的な学校とされるドイツ田園教育舎を考察対象として、学校空間の次元に焦点を当てつつ、システム理論に受容された「再参入(re-entry)」という考え方にもとづいて解釈することをねらいとした。これまでの研究において、田園教育舎を一種のパノプティコンとみなすような規律論的解釈が試みられたが、あらためてシステム理論的な基盤のもとで考察対象を眺めてみると、教育のリアリティーを捉えるためには、まだそれでは十分ではないという認識に至る。考察の結果、ドイツ田園教育舎では、「自然/文化」という図式が文化ヘリエントリーされることによって、学校空間の保護構造が特別な様式を備えていることが判明した。同時に、そのような様式のうちに「アジュール」空間が織り込まれていることを確認した。こうした「アジュール」空間の存在が教師と児童・生徒の関係性に大きな影響を及ぼしていることを示唆した(児童・生徒に対する「自由」の余地の供与、それにともなう教師の側の秩序維持に関するリスクの生起など)。

以上のように、本研究は、子どもの学習活動のあり方を大きく規定する学校空間の構成に注目し、新教育運動期の学校空間の変革の実態を、学習活動の変化との関連で比較史的に解明したものである。これは、従来の新教育運動研究ではほとんど未開拓の領域に踏み込む研究として、学術的特色と独創性を有する。また、本研究は19世紀末から20世紀初頭までという新教育の時期を対象とするものであるが、この時期のみの研究として完結してしまうのではなく、1960年代以降に世界的に広まるオープンスクール運動の思想的かつ実践的な源流を明らかにすることにつながるという意味で、より広い教育学的な意義を持つと言える。さらに、現代的な意義として、本研究において、学校空間とそこに込められるべき教育理念の意味について指摘したことは、いまだ画一的で閉鎖的な空間構成が支配的な我が国の学校建築のあり方を問い直すための有効な知見を提供する

ものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計11件)

- ① 渡邊隆信、ドイツ新教育における学校空間の創造—オーデンヴァルト校を事例として—、兵庫教育大学研究紀要、査読無、第39巻、2011年、pp.1-14。
- ② Miyamoto Kenichiro, The Evolution of School Buildings in America: From Teacher-Centered Schoolhouse to Child-Centered Learning Environments, Kwansei Gakuin University Humanities Review, 査読無、Vol. 15, 2010, pp.29-49.
- ③ Yamasaki Yoko, The impact of Western progressive educational ideas in Japan: 1868-1940, History of Education (History of Education Society in UK) 査読有, Vol.38, No.6, 2010, pp.1-14.
- ④ 宮本健市郎、アメリカ進歩主義教育運動における学校建築の機能転換—子ども中心の教育空間の試み(1)—、教育学論究』(関西学院大学)、査読無、創刊号、2009年、pp.149-158。

[学会発表] (計5件)

- ① 渡邊隆信、宮本健市郎、山崎洋子、山名淳、新教育における学校空間構成の改革教育史学会第54会大会コロキウム、2010年10月10日、早稲田大学。
- ② Yamana Jun, Reformpädagogik ohne Gartenstadt, Gartenstadt ohne Reformpädagogik: Was haben Japaner hier in Hellerau erlebt und, was haben sie davon mitgenommen?, Symposium “Vision Lebensreform: Lernen von Hellerau”, 2009年9月12日, Hellerau(Germany).
- ③ Yamasaki Yoko, New Idealism and Realism in educational thought: discourses within and beyond the university in the publication of progressive education, History of Education Society, 2008年9月6日, University of Cambridge(UK).

[図書] (計6件)

- ① 山崎洋子、成文堂、第Ⅱ部 歴史と教育、宮野安治、山崎洋子、菱刈晃夫『講義 教育原論—人間・歴史・道徳—』2011年、pp.65-165。
- ② Yamana Jun, Verlag Julius Klinkhardt,

Reformpädagogik als Metamorphose der Schulen durch die Dynamik des “Re-entry”: Zur Selbstkritik der Analyse Deutscher Landerziehungsheime, In: Kainer, E. u. a. (Hrsg.): Metamorphosen der Bildung. Bad Heilbrunn, 2011(頁未定).

- ③ 山名 淳、世織書房、生活改革のひび割れた構成物としての新教育—田園都市ヘレラウの諸教育施設をめぐる軋轢問題について—、矢野智司他編、変貌する教育学、2009年、pp.177-206, 210-214。

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡邊 隆信 (WATANABE TAKANOBU)

兵庫教育大学大学院・学校教育研究科・准教授

研究者番号：30294268

(2)研究分担者

宮本 健市郎 (MIYAMOTO KENICHIRO)

関西学院大学・教育学部・教授

研究者番号：50229887

山崎 洋子 (YAMASAKI YOKO)

武庫川女子大学・文学部・教授

研究者番号：40311823

山名 淳 (YAMANA JUN)

京都大学大学院・教育学研究科・准教授

研究者番号：80240050